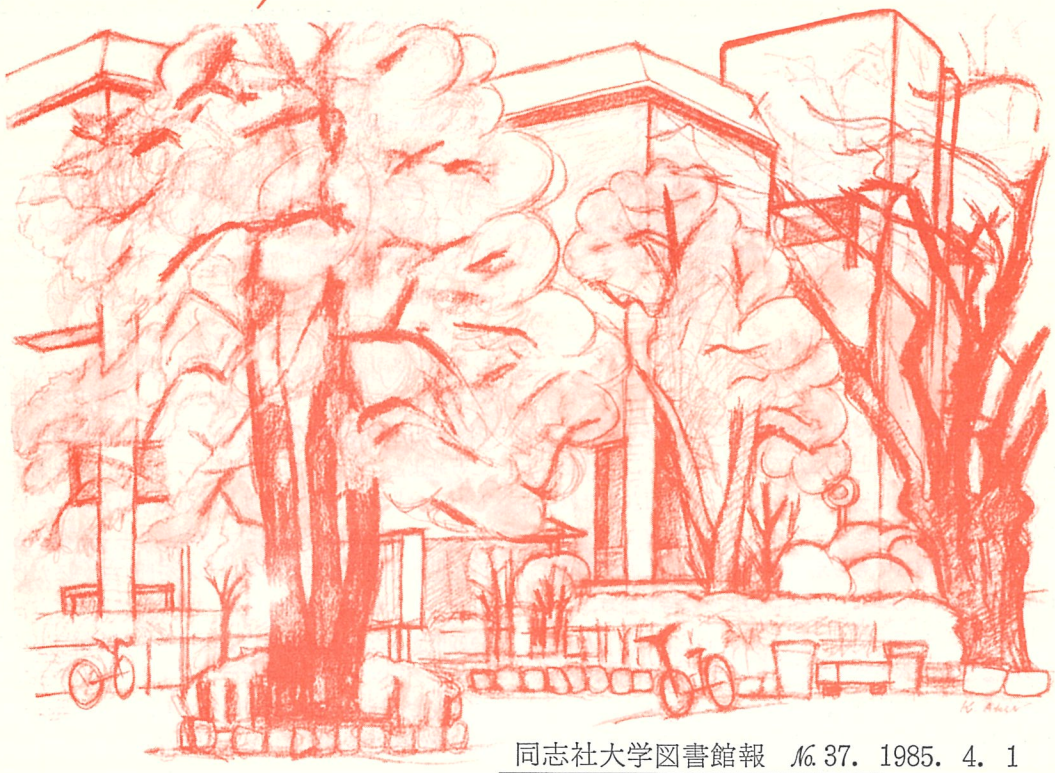
びぶりおてか



同志社大学図書館報 №37. 1985. 4. 1

ヒューマニティーズの ディヒューマナイゼイション

アメリカ研究所所長 岩山太次郎

図書館というものを真剣に利用するようになったのは大学に入ってからであるが，それでももう30年以上も図書館にご厄介になっている。この間，わたしの図書館利用法は変わってしまった。印刷・複写技術の発達やコンピューターの導入などがその変化の主な要因であろうが，よくわからないままに，便利になった機械や技術革新の恩恵を大変重宝がっている。ところが自分の利用法のこの変わり方はこれでよいのだろうかといつも自戒している。

30年近く前にアメリカのある大学図書館でとってもらったゼロックスのコピーを一点今でも大事に持っている。"The Art of Fiction" というパンフレットのコピーで，これはウオルター・ベザントというイギリスの文人が1884年に王立科学知識普及会で行なった講演である。わずか24枚のコピーであるが，"Photoduplication Services" という課の請求書がついていて，2ドル40セントであった。当時のわたしにはこれでも大金だったし，ゼロックス・コピーはそう簡単に作れなかったから，わたしには貴重なものだった。図書館にも個人が自由に使えるゼロックスの機械はまだ無い時代だし，コピーを

目　次

ヒューマニティーズの
　ディヒューマナイゼイション……1
新島襄と同志社に関する本……3
新キャンパス（田辺校舎）の図書館…6
実例を中心とした
　資料のさがし方(27)……8
ピックアップ
　ホークス編「ペリー日本遠征記」
　と「ペリー自筆書翰」及び
　ハイネ著「日本行紀」……11
「特別研究図書費」による購入図書…14

とってもらうためには，申込をしなくてはならなかった。その上，版権のことも厄介であったらしく，一冊全部のゼロックス・コピーをとるには版元の許可なしではできなかった。だからゼロックス・コピーなどというものはそう簡単に作ってもらえなかったから，この "The Art of Fiction" のコピーを宝物のように持ち帰り，これをもとに論文も書いた。

その頃までは，本や論文を読んでいて，これはと思う箇所はどうしたかというと，手書きで写すかタイプライターを打って写すしか方法はなかった。 *The Great Chain of Being* という恐ろしく難解ではあるが，大変立派な本の著者として有名な Arthur O. Lovejoy という（名前からして Love joy といういい名前の）学者は，一度読めばそれがどの本のどういうところにどんなように書かれていたかを正確に記憶できたという。このような人は別だが，凡人のわたしなどは，これはと思う箇所はカードに手書きで写すか——ということはうっかりすると誤写することになるが——タイプをたたくか——この場合もミスタイプもするわけであるが——しか方法はなかった。しかし，それでも自分の手で写すということは少なくとも一度は読んだわけである。

ところが，ゼロックスの機械が出まわるようになると，わたしの図書館利用法はすっかり変わってしまった。キャレルやブースでじっくりと腰を落ち着けて本とニラメッコしている時間よりも，目印を頁に挾んでおいたり，コピーをすべきものを探す時間の方が多くなり，図書館はゼロックス・コピーをとる場所になってしまった。ゼロックス機械は誤写をしないし，タイプライターよりも何十倍のスピード・アップにもつながった。

お目にかかろうと思ってもお目にかかれないようなMSや絶版書のファクシミリ版も続々と出版されるようになった。マイクロフイルム，マイクロフィシュ，マイクロカード，マイクロプリントなどで貴重な資料が容易に入手できるようにもなった。お蔭で研究には大変便利になった。その上，これらのリーディング・マシーンはボタンをひとつ押せば，鮮明なコピーまでとれるようにもなった。確かに便利だし，その恩恵を大いに受けて喜んでいる。

ここまでの図書館利用の変化ならよかったのであるが，錯覚を起こすようになってしまった。重要そうな本や論文に出くわすと，ろくに読みもしないで，ともかくコピーをとるようになってしまったのである。コピーをとると読んだような気になってしまう。こうなってしまっては，折角の革命的発見のゼロックスもわたしにはかえって害でしかない。ヒューマニティーズをしていながら，自分をディヒューマナイズしてしまったのである。

昔はアメリカならどこの大学図書館へ行っても，斯々然々のことを調べたいがと尋ねると，たちどころに，どの本のどういう箇所をまず読みなさい，次にああせよ，こうせよと，くどいほど説明してくれる，少々お年をめしたオバサンのライブラリアンがおられた。こういうオバサンはある意味では親切すぎた。こちらが頼みもしないことまで説明してくれる。それを聞いているだけでウンザリもしたが，余計だと思ったことがあとになって大いに役立ったこともあった。今はどの図書館でもインフォメイション・サービスはコンピューターがやってくれる。人にペコペコ頭をさげないでも，キーを押すだけで必要な情報が得られる。こちらで情報の選択もできる。時間もかからない。確かに便利になった。

こういう文明の利器のおかげで，ヒューマニティーズの学問も大いに進んだが，ヒューマニティーズの学問から抜けてしまったものもある。人間的な臭さがそれである。ヒューマニティーズは文明の利器を駆使しながらも，ヒューマナイズしつづけなければならない学問ではないかと思っている。

もう一度，ヒューマニティーズの原点のような，こんな25年前の風景に出くわしてみたい。

オハイオ州のど真中の山の中にあるケニヨン大学という小さなリベラル・アーツの大学の図書館でのことである。いつも夜になると決まった席で本を読まれる若い先生がおられた。その先生はゴールデン・レトリーヴァーという毛の長めの猟犬を従えて，ノソノソと閲覧室に入って来て，使いこまれて艶光りのした木の椅子にゆったり坐り，悠々と本を読み始められる。犬は何時間でもご主人の足下で静かに，これまた悠々と寝そべっている。図書館の入口には "NO PET" というステッカーが貼ってあったが，字の読めない犬に責任があるわけでなく，気持のよい雰囲気のなかで，ご主人と愛犬がそれぞれ気持よく時間を過していた。その人は George Lanning という *Kenyon Review* 誌の編集長代行で，後に立派な小説家になった人であった。

新島襄と同志社に関する本

—基本文献にかぞえられる図書—

河野仁昭

情報の洪水だとよくいわれる。そのなかに置かれているわたしたちに要求されるのは，おびただしい情報のなかから，信頼しうる最良のものを選択する主体的な判断力である。

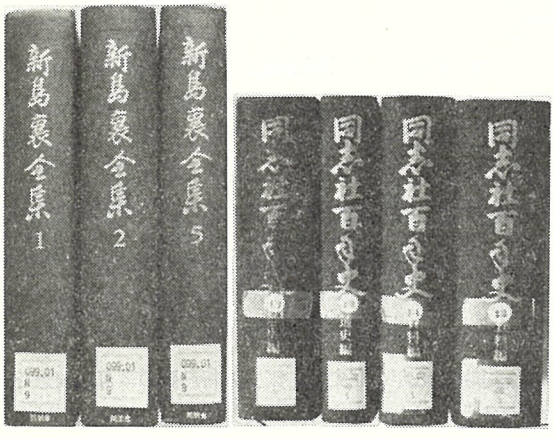
そうはいうものの，情報を図書のみに限ってみても，主体的な判断がどんなにむずかしいことかは，誰しも大なり小なり経験せざるをえない実情にある。解決のひとつの方法は，各分野の専門家が作成した文献リストによって選択の目安をえることであり，各科目の担当者が教室で指示する文献にまずアプローチすることだろう。読書の経験を積むに従って，主体的な判断力はおのずからついてくる。

明治末期に同志社普通学校（中学校の前身）を卒業して京都大学の考古学の教授になられた梅原末治博士は，専門の分野に関する書物を10冊じっくり読めば，その分野の専門家になれると書いておられる。読書経験を積んでのちに選び抜かれた10冊，という意味であろう。

以下に掲げるのは，新島襄と同志社に関するさまざまな文献のなかで，これが基本的なものであり，これだけは4年間の在学中にぜひ読んでいただきたいと思われるものである。テレビの時代，映像の時代だといわれる現在，ぎっしり活字が並んだ書物は敬遠されがちらしいけれども，ずしりと重い1冊の本を読み了えた充足感は，テレビや映像では味わえないだろう。

新島襄に関する文献

同志社大学学生部が，新入学生のために毎年編集発行している『私学同志社』に，文学部の北垣宗治教授によるゆきとどいた「新島襄に関する基本文献」が掲げられており，それぞれの文献に簡単な解説もつけておられるので参考になる。それで十分なのだが，一挙にそのすべてを読了するのは困難だろうから，ここにはより厳選して掲げてみることにしたい。



(1) 新島襄全集編集委員会編『**新島襄全集**』

（開099.01；N－9）全10巻　同朋舎（刊行中）

新島襄はあまり著述をする人ではなかった。そのことについて推測される理由は，河野仁昭「新島襄全集をめぐって」（同志社，1985刊）にゆずるが，著書・論文などをあまり残さなかったことと，いまにいたるまで個人全集がなかったこととは，おそらく無関係ではない。

生前に公表された著述こそあまりなかったが，彼にはおびただしい草稿や日記，手紙がある。それらを生前に発表されたものと合せて，主題別に巻を編成したのがこの全集である。これによって，新島の手になる文章のすべてが網羅されるにいたった。

新島の基本文献であるため，編集の方針として，可能なかぎり原資料そのままを活字によって復元することにつとめたので，文字や文体など若い人たちには読みづらく，なじみにくい面もあろうと思うが，新島が書いたものを直接読むことによって新島を理解するよう努めていただきたい。この全集をもとにして，読みやすくコンパクトな選集が編集出版されることが望まれる。

各巻の内容の概略は次のとおりである。

第1巻「教育編」（1983. 2 刊）

同志社の創立と初期の同志社に関する新島資料を網羅したほか，彼の演説草稿，明治期のわが国の教育制度の基礎となった「理事功程」の草稿などを収録する。

これらの資料のうち，「**同志社設立の始末**」（明治16. 4）と「**同志社大学設立の旨意**」（同21. 11）は，先の『私学同志社』に後者が掲載されているほか，両者ともパンフレットなどになっているので，まずそれから読んでいただきたい。

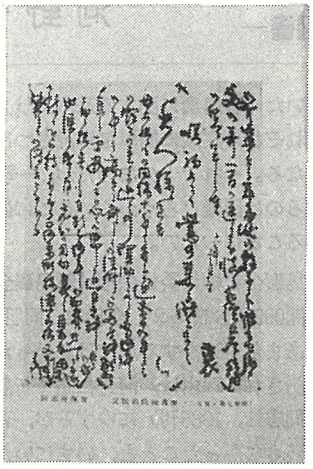
第2巻「宗教編」（1983. 7 刊）

説教と宗教に関する演説草稿など，キリスト者新島の手になる資料が網羅されている。それらのうち，「説教稿Ⅰ」と「宗教関係演説稿」は，比較的よくまとめられていて読みやすい。必見の文章でもある。

第3，4巻「書簡編Ⅰ・Ⅱ」（いずれも未刊）

900通を超える書簡が収録されるが，さしあたっていまは同志社編『**新島襄書簡集**』（閉099.01；N-2）（岩波文庫，昭和29. 12）を読んでいただきたい。これには厳選

された約100通の手紙が収録されているほか，それぞれの手紙に簡単な解説がつけられて読解に便利である。



新島襄書簡

第5巻「日記・紀行編」（1984. 6 刊）

文久2（1862）年，20歳の新島がはじめて江戸から岡山まで航海したときの日記にはじまり，明治23年1月大磯で客死する直前までの14点の日誌のほか，彼の詩歌が収録されている。同志社創立後，キリスト教伝道や大学設立募金運動で全国各地を旅した新島の足跡をたどりながら，それら各地の現状や交通機関などを比較してみるのもひとつの読み方かもしれない。

第6巻「英文書簡編」（近日刊行の予定）

第7巻「英文日記・紀行編」（未刊）

よほど英語の力がなければ読解はむずかしいだろうが，幕末から明治初期にかけて一人の日本人が綴った英文資料という点でも，貴重な文献である。同志社人なら英語を敬遠してはなるまい。チャレンジしてほしい。

第8巻「補遺・雑纂編」（未刊）

第9巻「来簡編」（未刊）

第8巻に収録される資料の一つに，詳細な新島年譜が予定されており，いま作成中である。いままでは森中章光編**『新島襄先生詳年譜』**（閉099.01；M-4）（同志社，昭和34. 11刊）が利用されてきた。第9巻には各界の人物から新島に送られた手紙が収録される。

第10巻「新島襄の生涯と手紙」（1985. 4 刊）

函館から脱国した新島は，ボストンの実業家A．ハーディー夫妻によるわが子同然の庇護をえて，最良の学校に学びえた。夫妻の実子の一人A．S．ハーディーは，新島とほぼ同年輩であり，新島と交友があった。多方面に活躍していたそのA．S．ハーディーは，新島の死を知ってただちに新島伝の執筆を思いたち，新島が両親に送った手紙を中心にまとめたのがこの本で，原書名は *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*（閉099.01；H-1a），新島の死の翌年ボストンで出版された。これを北垣宗治教授が，原著が出て以来はじめて，現代文で読みやすく訳され，詳細な注をつけられた。新島全集はこの巻から読みはじめるのがいいだろう。原書は1980年に同志社から復刻本が出ているので，併読することができる。

(2) J．D．デイヴィス著，北垣宗治訳**『新島襄の生涯』**（閉099.01；D2-3）（小学館，1977.3 刊）

デイヴィスは同志社創立にあたって，山本覚馬とともに新島を援けて以後，明治末年まで同志社の教授をつとめた人である。彼は新島の死後，悲しみをこらえてこの伝記を書きあげ，新島が亡くなった年のうちに丸善から出版した。原書名は *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima* で，翌24年1月には，村田勤・松浦政泰共訳**『新島襄先生伝』**（閉099.01；D2-2a）（警醒社刊）の翻訳が出ている。その後，原著も改訂され，訳者も山本美越乃に代って版を重ねてきた。戦前では日本語になっている善良の新島伝であったし，いまも新島伝の古典として多くの人に読まれている。

同志社創立100年を機会に，北垣教授が改訂版を底本として，読みやすい現代文に訳されたのがこれである。

(3) 和田洋一著**『新島襄』**（閉099.01；W2-1a）（日本基督教団出版局，1973. 4 刊）

著者は戦前から同志社大学で教鞭をとられた方で，戦後は文学部社会学科の新聞学を担当され，現在名誉教授である。人間新島襄の本質をとらえようとしたこの伝記は，柔軟な文体とあいまって，若い読者にもアピールするものを多分にもつはずである。

同志社に関する文献

同志社110年の歴史は，創立者新島襄の教育の理想を継承し発展せしめようとする姿勢によって貫かれていたといえる。だから，新島を知ることは同志社を知ること

だといってよい。

しかし，新島は創立後わずか10余年にして此の世を去った。それだけでなく，日本の社会から孤立しては存在しえない同志社は，社会的状況の変遷や，思想・学術・文化等の進展にともなって，影響もうけ，変化もしてきた。そうした歴史と，現在なおかつ不変のものを端的に叙述することは至難であり，だから，そうした意味での良書はあまりない。

以上に掲げる文献はかなり大部なものだが，『新島襄全集』とともに少し時間をかけてもぜひ読了していただきたいものである。

(1) 同志社五十年史編纂委員会編『**同志社五十年史**』(閉099.02,D2)(同志社校友会，昭和5．7刊)

同志社が創立50周年を迎えたのは，大正14(1925)年であった。その前年から『五十年史』の編纂に着手したのであったが，委員会の改組や執筆者の変更などがあり，6年目にしてようやく出版にこぎつけるという難産であった。この時代にはまだ，創立したばかりの同志社で学び，明治・大正の同志社を知る卒業生が多数健在であったから，そうした人も執筆陣に加わっており，また，それら生き証人ともいうべき人々にも読まれることを念頭においての編纂であったはずで，その点にこの『五十年史』の特徴の一つがあるといってよい。同志社教会をはじめ，学生のスポーツや寄宿舎などにも，それぞれ章を割いているのも興味ぶかい。

編纂に着手した当初，委員会は同志社に学んだこともある歌人の青山霞村に執筆を依託したのであったが，彼の原稿は参考資料として用いられるにとどまった。『同志社五十年史』が出版されてのち，彼は『**同志社五十年裏面史**』(閉099.02;A)(からすき社，昭和6．7刊)として刊行した。多数の人々に読まれた文献の一つである。

(2) 上野直蔵代表編者『**同志社百年史—通史編Ⅰ・Ⅱ**』(閉099.02;DB-5)(学校法人同志社 1979．11刊)

昭和50(1975)年に創立100周年を迎えた同志社が，その記念事業のひとつとして編纂刊行したもので，これは「資料編Ⅰ・Ⅱ」と対になっている。さいわい，同志社創立以来の資料が豊富に社史資料室に収蔵されているので，それらの資料に即して，客観的に同志社史をえがこうとしたもので，学問的な評価にも耐えうる学校史である。

新島襄が1874(明治7)年10月9日に，ラットランドのグレイス教会を会場としておこなわれたアメリカン・ボード(American Board of Commissioners of Foreign Missions)の第65回年会の席で，日本に帰国してキリスト教主義の学校を創りたいと訴えて，5000ドルの寄付申込みを得たことを起点として，創立100周年を迎えた学園の現況までが，次の5部に分けて叙述されている。

第1部　創業と成育(明治前半期)
第2部　キリスト教教育の受難(明治後半期)
第3部　大学への道(大正期)
第4部　戦時下の学府(昭和前半期)
第5部　再生と発展(第二次世界大戦後)

1600ページに及ぶ大冊なので，一挙に読みとおすことはむずかしいから，各部をそれぞれ独立した書物と考えて読めばいいだろうと思う。「資料編」にはかなり詳しい同志社「年表」が添えられている。

同志社創立前後の事情については，森中章光著『**同志社開校事情**』(同志社新島研究会，昭和36．4刊)が貴重な文献の一つである。学生部が新入学生のために編集発行する『**私学同志社**』は，同志社史に関する章を欠くのが残念だが(そのかわりに「キャンパス点描」と「略年譜」を収録している)，ガイド・ブックとしてはこれでよいだろう。

以上何点かの文献をあげたが，これで尽きるわけではもちろんない。また，単行本以外にも，雑誌やパンフレットなどに種々の貴重な文献が掲げられている。紙幅の関係でふれることができなかったが，河野仁昭編「新島襄に関する文献ノート」(閉099.01;K3)(『同志社談叢』№2～5)，同編「同志社に関する文献目録」(『同志社談叢』№5)に文献名はほぼ網羅されているから，参考にして下さることを願っている。筆者や主題などによって適宜選択して読みはじめればよいだろうと思う。

書庫見学

ちょっと書庫をのぞいてみませんか。

本館には30万冊をこえる図書が所蔵されています。そのうち、開架図書室には、参考書をを含めても、6万冊たらずの本が配架されているにすぎません。

書庫には、いったいどんな資料が所蔵されているのか、ひとめご覧になってはいかがでしょう。

〔日　　時〕　○毎月15日(9月のみ　20日)　○14時30分より約50分間
ただし、土・日曜日の場合、次の月曜日　祝日の場合、翌日

〔集合場所〕　○AV室(本館2F)

新キャンパス(田辺校舎)の図書館

施設の概要

すでに「入学案内」，「同志社大学通信」などでご承知の通り，新しいキャンパス(田辺校舎)の利用は，1986年（昭和61年）4月から開始し，全学部第1部1・2年次の授業を行なうことになっています。新しいキャンパスは，緑にかこまれた静かな丘陵地帯にあり，約76万㎡の広大なもの（今出川・新町キャンパスの約9.4倍に相当）で，図書館をはじめとして教室，研究室，体育関連施設，事務管理棟，課外活動施設など今出川キャンパスと同様に赤レンガ造りを基調とする建物が整うことになっています。

なかでも，教学の中心的機能を果す図書館は，正門を入ると楠・イチョウなどの並木とともに芝生をしきつめた広場を前庭に，文字通り新しいキャンパスの中心位置に配され，学生諸君の勉学の場に最適な環境にあるといえましょう。図書館利用への意欲・関心は，いやがうえにもそそられることでしょう。

現今出川キャンパスの図書館（以下今出川館と称す）の案内は，「Students' guide（学生便覧）」に詳しく紹介されていますので，本号では今後部分的に変更される可能性もありますが，新キャンパスの図書館の施設を中心にその概要を紹介いたしましょう。

Ⅰ　基本構想

まず第1部1・2年次生約8,600名を利用対象とする〝学生の学習を主目的とした施設〟としての機能の充実をはかることを基本方針として計画が進められてきました。その骨格をなす重要な要素である図書資料の内容は，新キャンパスにおける授業・カリキュラムに沿ったものを中心に収集，整備することを主眼におき，充実した学生生活が送れるよう準備しています。

スタート当初の蔵書冊数は約3万冊ですが，勉学には対応可能な冊数と考えられます。蔵書の内容は，利用調査に基づいたもの，および教員により推せんされた基本図書，参考図書，雑誌，新聞などの基本的な図書資料を網羅した構成になります。

一方，図書資料とともに重要な要素である施設は，付表の如く規模も含めて今出川館と遜色がない図書館機能として充実したものとなります。

閲覧方式は，利用者が直接資料を手にし，館内閲覧もしくは館外貸出の手続をとる全面開架方式を採用します。なお，身体障害者に対する施設・設備についても，対面朗読室，点字室，エレベーターの利用，便所等できる限りの配慮のもとに計画されています。

Ⅱ　施設の概要

主な施設の配置は，別掲「館内案内図」の通りですが各階各室の機能およびその内容の概略をつぎに紹介いたしましょう。

＜1　階＞

玄関を入るとロビー風のホールがあり，席に座ったまま閲覧できる新聞コーナー（全国紙，ローカル新聞など約20紙）とラウンジ（喫煙コーナー併設）があります。ラウンジは，図書館利用における勉学の疲れをいやすための休憩室の雰囲気をかもし出すコーナーです。

ホール南側には，休暇中など閲覧業務取扱時間外にも開放される自習室としての性格をもつ第1～第3読書室（席数合計318席）があります。閲覧机は，パネルで区切られ気を散らさずに勉学できるよう配慮されています。

なお，ホール北側の書庫は，当初は未仕上げですが，参考図書・雑誌室などの資料が増加した段階で比較的利用度の低い雑誌のバックナンバーを中心に配架し，各閲覧室と同様全面開架方式を採用します。閲覧席は最終的には39席を予定しています。

＜2　階＞

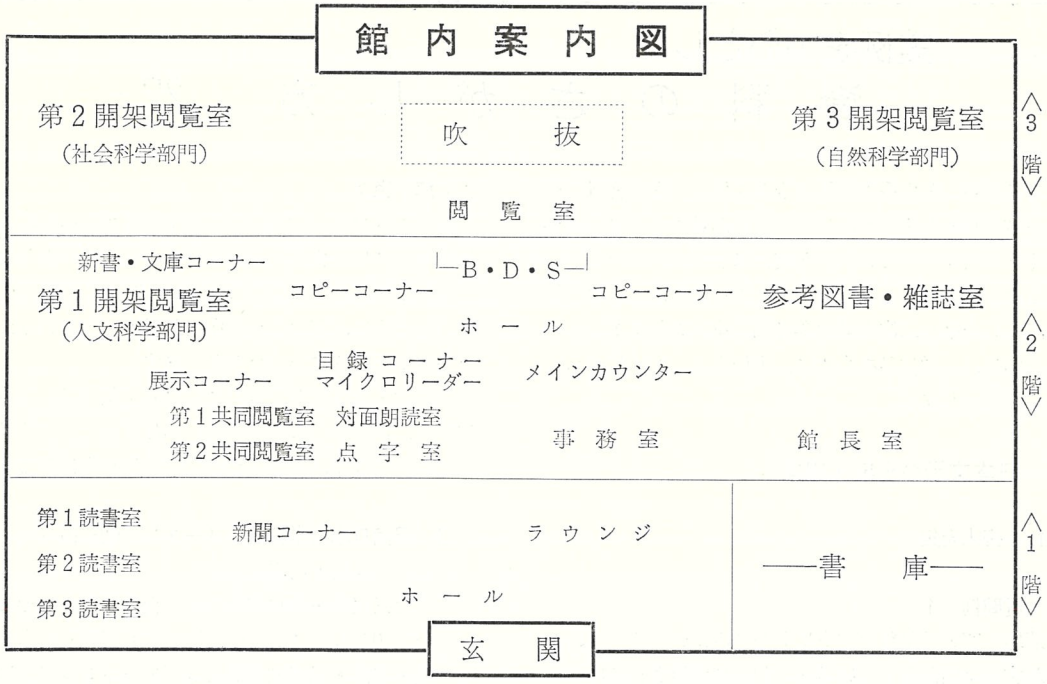
2・3階は，図書館の中枢をなすフロアーとなります。2階への出入は，1階ホール中央の階段および西側に隣接する特別教室棟等とつながれたブリッジからのアプローチの2ケ所から可能です。出入口には，ゲートがあります。これは，電子工学を応用した図書無断持出防止装置で，ブック・ディテクション・システム（BDS）といいます。カバン等の持物は自由に持ち込めます。

ゲートを通るとホールがあります。その正面に図書館

付表

	施設面積	閲覧席	開架図書	所蔵雑誌	図書収蔵冊数
田辺図書館	6,600㎡	1,200席	10万冊	300種	28万冊
今出川図書館	9,686㎡	1,200席	6万冊	4,060種	60万冊

※各項目：概数



利用の心臓ともいうべき総延長13m余のメインカウンターが構えています。このカウンターでは，図書貸出・返却の手続をはじめとして，図書利用上の質問受付すなわち各種資料の探索に係員が援助する参考業務（レファレンス・サービス）を取り扱います。ホールには，そのほかセルフ式のコピーコーナー，目録コーナー，マイクロリーダーコーナー，新刊書・稀書などの展示コーナーが併設されます。

ホール北側には，参考図書・雑誌室（閲覧席246席）があります。参考図書は，調査に必要な百科事典・専門事典・便覧・辞典・統計書・文献目録・地図帳など，また雑誌は，主要学術誌・一般誌などが主な種類です。

ホール南側には，第1開架閲覧室（204席）があります。ここには人文科学関係（総記・哲学・宗教・歴史・地理・芸術・文学など）の一般書，新書・文庫本（岩波，新潮，中公などの文庫6種および岩波，中公，Penguin books，Pelican books など新書版類5種）を配架します。

共同で図書資料を閲覧する目的の第1～第2共同閲覧室（10・20席），対面朗読室，点字室などもメインカウンターに近い位置に設けられます。また，図書貸出・返却手続，図書資料所蔵検索などコンピュータを駆使して，手続あるいは検索の迅速性・簡素化を図るために順次機械化（電算処理）を進める予定です。

＜3　階＞

南側には，第2開架閲覧室（138席），北側には，第3開架閲覧室（132席），中央部分には閲覧室（126席）および閲覧コーナー（84席）が配置されます。

第2開架閲覧室には，社会科学関係（政治・法律・経済・経営・社会学・教育・民俗学・産業など）の一般書を配架します。

第3開架閲覧室には，自然科学関係（数学・自然科学・工学・工業・技術など）の一般書を配架します。

中央東側の閲覧室は，開架閲覧室とは独立して，より静かな雰囲気で読書，勉学ができるように配慮されています。閲覧机もパネルで区切られ，自習室的な機能を持ち合せ，窓からの展望は図書館前の広場は勿論，田辺の街並，南山城の山々も眺望できる素晴らしい環境の閲覧室といえましょう。

3階へのアプローチは，2階ホール両サイドの階段と南側の階段（あるいはエレベーター）によることになります。

なお，図書館として大学の使命である教育，研究，学習の質的向上に貢献するためにより力を注ぎ，発揮せねばなりません。そのためには，まず今出川館と田辺館にわたる一体的・有機的な連携・整合性を保ち図書館機能を高める一層の努力が必要と考えられます。

つぎの機会には，図書の利用とその手続，目録の使い方など，図書館利用上の詳細を紹介する予定です。

実例を中心とした
資料のさがし方 —27—

ある著者の著作を図書館でさがす場合，まず著者目録カードを検索しますが，目的のものが見つからない時がよくあります。見たい資料が実際に所蔵されていても，このようにカード目録だけでは，資料に到達できない場合，これを補う二次文献が参考図書室にあります。

今回は，文学作品を中心に，実例をとり上げながらこれらを紹介します。

Ⅰ　日本文学の全集・選集

1.　個人全集

〔質問例　1〕

菊地　寛の「恩讐の彼方に」を読みたい。著者目録をさがすと全集が入っているが，何巻に収録されているか分らない。

〔調　査〕

著者目録を引くと，「菊地　寛文学全集」のカードが入っているが，各巻の作品全てを記載していない。

（例）　第1巻：　暴徒の子　屋上の狂人　海の勇者
　　奇蹟　父帰るほか（1960）

「現代日本文学綜覧シリーズ」の「個人全集・内容綜覧」をさがすと，本館所蔵のものと同じ文芸春秋社の全集を収録しており，「恩讐の彼方に」は第2巻に収められていることが分った。尚，第2巻には23点もの作品が収められている。

2.　多数著者の全集

〔質問例　2〕

阿川弘之の「雲の墓標」を読みたい。

〔調　査〕

新・旧著者目録ともになし。

「個人全集・内容総覧」をさがすと，「阿川弘之自選作品」の第1巻に収められていることが分るが，残念ながら本館では所蔵していない（昭和60年3月現在）。

同じシリーズの「全集・作家名綜覧」で阿川弘之の頃をさがすと，「雲の墓標」は「新日本文学全集」第1巻〔913.68；S2〕，「昭和戦争文学全集」第10巻〔913.68；S3〕，「現代日本文学大系」第88巻〔918.6；G3〕等，11点の文学全集に収められているものを所蔵。

＜解　説＞

短編小説など，多数の作品を1冊にまとめた場合，目録カードには全作品名を記載できない場合があります。

又，多数著者の全集では，各巻の書名が「阿川弘之集」というように，どのような作品が収められているか目録カードでは分らない場合があります。

総目次・総索引が付されていない全集では，現物を手に取り，目次を順次さがしていかなければなりません。

このような時，次のような文献を使うと便利です。

○「**現代日本文学綜覧シリーズ**」〔028.91；G〕

1.　「全集・内容総覧」

大正14年～昭和56年の間に刊行された主要な文学全集104種，3,200冊の内容目次を収録したもの。詩歌・戯曲・児童文学など専門のジャンルについての全集は除く。配列は全集毎の出版年順。出版社別の目次あり。

2.　「全集・作家名綜覧」

1に収録された作家名約3,500名のもとに，それぞれの作品名と解説，年譜，参考文献をまとめて，収載された全集名を指示したもの。配列は作家名の50音順。

3.　「全集・作品名綜覧」

1に収録された作品名約42,000点を作品名毎にまとめ，収載された全集名を指示したもの。解説，年譜，参考文献は，巻末に対象となった作家名毎にまとめる。

4.　「個人全集・内容綜覧」

文学者及び関連性のある思想家の個人全集の内，底本とされている520名の個人全集557点，約5,500冊の内容細目を収録したもの。配列は作家名の50音順。

○「**日本叢書索引**」新版〔027.4；H〕

記紀～明治初年の間の古典的著作を50音順に配列し，収載された昭和31年まで刊行の全集・叢書名を指示したもの。

○「**全集・叢書細目総覧**」古典編〔027.4；K〕

明治～昭和45年の間に刊行された全集・叢書で，国会図書館が所蔵するものの内，幕末までの古典的著作を内容とする約1,200点を収録する。

第1巻は全集・叢書名を50音順に配列し，内容細目を付す。第2巻は内容細目（書名）の索引。

Ⅱ　雑誌・新聞

〔質問例　3〕

藤沢桓夫の初期の作品，「ローザになれなかった女」をさがしている。

〔調　査〕

新・旧著者目録ともになし。

「個人全集・内容綜覧」には「藤沢桓夫長編小説選集」を収録しているが，その中には見当らない。「全集・作家名綜覧」になし。

次の３方法の調査で，いずれも判明。

①「日本近代文学大事典」人名編で藤沢桓夫の項を見ると，「ローザになれなかった女」（「文学」昭4．10）とあり，「文学」〔P910.1；B５〕に収載されていることが分る。

②「現代日本文芸総覧」の人名索引により，順次さがして行くと「文学」第１号，P.18―36に収載していることが分る。

③「全集・作家名総覧」により，「大衆文学大系」第23巻の藤沢桓夫年譜をさがすと，昭和４年の頃に，〝10月「ローザになれなかった女」を「文学」に……発表。〟とある。

〔解　説〕

さがしている文学作品が，全集や著作集に収録されてない場合があります。又，著作集や単行図書が発行されてない場合や，発行されていても図書館に所蔵していない場合があります。このような時，発表された雑誌名や新聞名を調べてみます。

◎文学事典

作家名，作品名から検索し，目的のものがどの雑誌，あるいは新聞に，いつ発表されたかを調べます。

○「日本近代文学大事典」〔910.3；N７〕
○「日本文学大辞典」〔910.3；N―1a〕
○「現代日本文学大事典」〔910.3；G〕
○「大衆文学事典」〔910.3；T8―1a〕
○「現代作家事典」〔910.3；G2―1a〕

◎雑誌記事索引，総目次

発表誌名が分っていれば，その雑誌の総索引・総目次をさがせばよいのですが（例：「中央公論総目次」），そうでない場合，個々の索引をあたるのは手間がかかりますので，多数雑誌の記事を収録した索引を使います。主に，著者索引等で作家名から検索します。

○「現代日本文芸総覧」〔028.91；O〕

明治37年～昭和20年の間に刊行された文芸・思想関係主要雑誌の目次を収録したもの。「文芸春秋」，「中央公論」は除く。巻末に人名索引あり。

○「雑誌記事索引」人文・社会編〔P027；Z３〕

文学・語学編。但し，小説は昭和23年９月―33年９月の間しか収録していない。著者索引あり。

○「文芸年鑑」〔910.5；B〕

１年間分の雑誌新聞掲載作品目録を毎年収録。戦後のものは著者索引がないので，各誌毎の内容をさがさなければならないが，最近発表された作品を調べることができる。

◎年譜・著作目録

ある作家の年譜や著作目録を調べることによって，作品が，雑誌・新聞に限らず，どういう形で発表あるいは刊行されたかを知ることができます。年譜・著作目録は，その作家の著書やその作家についての研究書，あるいは多数作家の年譜集成書等，色々な形で存在しています。

（年譜・著作目録をさがす資料）

○「日本人物文献目録」〔028.281；H〕
○「人物文献索引」〔028.28；K２〕
○「人物書誌索引」〔027.38；J〕
○「日本書誌の書誌」人物編〔025.1；A３〕
○「年刊人物文献目録」〔028.28；N〕
○「書誌年鑑」〔028；A３〕

（年譜・著作目録を集めた資料）

○「近代文学研究叢書」〔910.26；K５〕
○「人物書誌大系」〔027.38；J２〕
○「近代作家年譜集成」「国文学 解釈と教材の研究」第28巻６号〔P910.1；K〕

Ⅲ　邦訳欧米文学

〔質問例　4〕

ジャンク・ロンドンの「荒野の呼び声」を，カード目録でさがしたけれど出て来ない。この図書館にはないのか。

〔調　査〕

著者目録（カード）になし。二次文献を当る。

「明治・大正・昭和　翻訳文学目録」，「西洋文学全集翻訳目録」等で，ロンドンの項を見るとかなりの数，邦訳されている。文庫本や児童文学書も多いが，図書館では「現代アメリカ文学全集」第14巻，「現代アメリカ文学選集」第６巻，「岩波文庫」赤315―1に収録したものを所蔵。

〔解　説〕

外国文学を邦訳したものをさがす場合，まず著者目録を検索しますが，目的のものが，単行書や個人全集として所蔵していない場合は，発見することができません。このような時，多数著者の作品を集めた文学全集などに収められている場合がありますので，それらがどのような形で存在しているかを調べるための二次文献を調べる必要が出て来ます。尚，調査に当っては，使用する二次文献の収録範囲（年）に注意する必要があります。実際には，現在まで邦訳されたものを可能な限りリスト・アップし，その中から選び出す方法が良いでしょう。

○「明治・大正・昭和　翻訳文学目録」〔028.9；K〕

1868年（明治元年）～1955年に刊行された翻訳文学と，収録した著者の文学以外のものも収録。配列は著者名のカナ表記の50音順。但し，明治期は刊年順に配列。欧文の著者索引あり。

○「西洋文学全集翻訳目録」〔028.9；T〕

前書を受けて，1956年～1976年に出版された作品を，主要な文学全集の内より選択し収録。配列は著者名のカナ表記の50音順。

○「翻訳図書目録」〔027.34；N〕

現在での収録期間は1977年～1984年で，日本で刊行された翻訳文献約3万点を収録。Ⅰ：総記・人文・社会，Ⅱ：科学・技術・産業，Ⅲ：芸術・言語・文学の3分冊からなっており，文学に限らず，各分野の翻訳文献をさがすことができる。配列は著者・編者の姓（原綴）のＡＢＣ順。原書名索引，訳書名索引，原著者カナ表記索引が付いており，便利である。

○「東京都立中央図書館蔵　合集収載翻訳文学索引」〔028.9；T２〕

1945年～1975年に刊行された，同館所蔵の合集約230点に収録された2,400人の著者の翻訳作品約1万点の索引。文学作品以外のものも収録。配列は著者名のカナ表記の50音順。著者名索引（欧文），作品名索引（欧文，和文）あり。

○「西洋文学個人全集作品目録」〔028.9；T－２〕

1956年～1979年に刊行された，個人全集の作品を分出して収録。配列は著者名のカナ表記の50音順。

○「明治・大正・昭和　邦訳アメリカ文学書目」〔028.939；F〕

1868年～1967年の百年間に刊行されたアメリカ人の邦訳文学的作品を収録。配列は著者名（原綴）のＡＢＣ順。書名索引（欧文），邦訳書名・訳者索引あり。前記「明治・大正・昭和　翻訳文学目録」を利用し，1955年以降のものを増補訂正したもの。

○「世界文学シリーズ」　各巻の翻訳文献の項

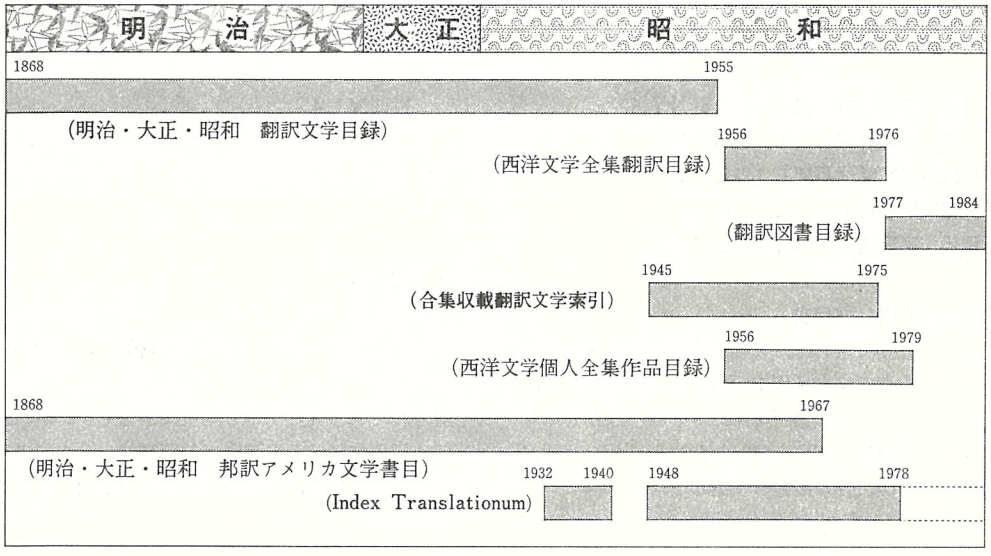
このシリーズは，各国文学の作家と重要作品の解説が中心となっているが，収録した作家の翻訳作品を，巻末にまとめている。現在，次のものを所蔵しているが，各巻はそれぞれ国別に配架。

「イギリス文学案内」〔930.3；N〕
「アメリカ文学案内」〔939.03；T〕
「ドイツ文学案内」〔940；O－２〕
「フランス文学案内」〔950；S－２〕
「ロシア文学案内」〔980.3；N〕

○「Index Translationum」

1932年～1940年〔027.34；Ⅰ－1a〕，1948年～1978年（継続中）〔027.34；Ⅰ〕に世界で刊行されたあらゆる分野の翻訳書を収録。配列は各国名毎に，国際十進分類法による主題順。検索は原著者名索引により，日本で刊行されたものがあるかどうかを調べる。

収録範囲

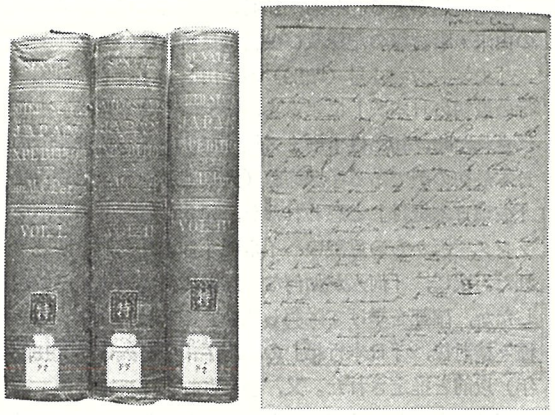


ホークス編『ペリー日本遠征記』と『ペリー自筆書翰』及びハイネ著『日本行紀』

ペリー（1794—1858）は15歳で海軍に入り1812年の米英戦争，地中海・アフリカ巡航，西インド諸島での海賊狩り，メキシコ戦争等を経て1852年東インド艦隊提督となり，日本と通商開始の命を受け1853年浦賀に来航，大統領の国書を伝達，翌1854年再び江戸湾に入り神奈川沖で条約締結を要求，3月日米和親条約にさらに6月下田で追加条約に調印，鎖国日本の開国への道を開いた。

1855年1月帰国後政府の委嘱を受けホークスに命じて編纂せしめたのが日本遠征の公式記録のホークス編「ペリー日本遠征記」である（Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan…… Commodore M. C. Perry…… by Francis L. Hawks)。ペリー自身の航海日記と公文書を中心に部下の航海記や日記・報告書を用いて編纂，1856年に公刊された。この「遠征記」には色々異本があり，まず上院版と下院版の2種があり，その内容構成は第1巻は遠征記の本文，第2巻は諸調査の報告書類，第3巻は黄道光の観察記録である。同大図所蔵本（ケーリ文庫〔(貴)㊫F291.09;P7〕，荒木文庫〔㊫291.09;P7，㊥917;H3—1a〕は全て上院版の3冊本である。又官版2種の外に町版（普及版）がある。官版の第1巻に該当する1冊本だ（荒木文庫〔㊫291.09;P7—1c〕）。ペリーの評価は「開国の恩人」とか逆に「侵略者」とか言われているが，この「日本遠征記」自体はペリー来航と云う歴史上の一大事件に関するその当事者達の詳細なる記録であり，当時の日本の社会・文化・自然等全てに関する客観的科学的なる記録であって，原書（官版）の3冊本とペルリ提督日本遠征記（土屋・玉城訳）〔弘文荘版：㊫291.09;P7—1a，㊥917;H3〕〔岩波版：人文研・アメ研所蔵〕が，日本の幕末史研究の書物には，しばしば参考文献として引用されている。尚，原書（官版）の第1巻には石版の色刷の挿画90枚の他に大小合わせて78の木口彫の木版画のカットが本文の中に挿入されている。日本の風俗習慣等のスケッチだけでなく，遠征途中立寄った東南アジアのエキゾチックな美しい絵も多数入っていて楽しいものだ。

又，俗に云う「風呂屋版」と云うのがある。後で述べる画家ハイネが実景から写生したものを，黄・淡藍・墨の3色刷の砂目石版に複製した「下田の公衆浴場の図」入りの版である。官版が全部製本されない中に，風紀をみだす恐れがあるとの事で，この図が落丁になったものが多いと云う。ビブリオ・マニアが欲する版と云われているが，その図はローマ時代のカラカラ浴場の雰囲気で，後述のハイネ著「日本行紀」のドイツ語版にも，ハイネが写生したものをそのまま木版画にしたのがあり，黄・墨の2色刷だが，こちらの方がより日本的である。同大図所蔵本ではケーリ文庫以外は全て風呂屋版である。



ケーリ文庫貴重書ホークス編
「ペリー日本遠征記」上院版と「ペリー自筆書翰」

さて，前述の画家ハイネ著「日本行紀」を紹介しよう。ヴイルヘルム・ハイネ（Heine, Wilhelm, 1827—1885）はドレスデン生まれの画家・旅行家で，ペリー日本遠征の報を聞くと，ペリー艦隊に加わり，遠征途中の各地の人間・風物をスケッチし，それらの絵は後で整理されホークス編「ペリー日本遠征記」を飾る事になった。又，同時に彼はペリー艦隊に従って航海中，各寄港地から，故国ドイツに残した肉親への手紙の形で，原稿をも書き続け，「遠征記」の姉妹篇とも云える「日本行紀」を書き上げた。原本（ドイツ語版は）1856年ライプチヒで刊行，2冊本である（Reise um die erde nach Japan…）〔荒木文庫(貴)㊫290.9;H7〕。又，オランダ語版〔1冊本〕（Reis om de wereld naar Japan…）やフランス語版〔1冊本〕（Voyage autour du monde. Le Japon…）も作られた。同大図所蔵のハイネ著「日本行紀」（荒木

文庫(貴)㊫291.09;P7—1b)はオランダ語版全文からの邦訳である(和綴じ16冊〔35篇13冊附考3巻3冊，縦26.4cm横18.4cm〕で，本文は和紙に無罫であるが，漢字平仮名交りで細書されている。そして，各冊に「元山文庫」と「堀田氏印」の蔵印(朱印)があり，第2冊には訂正の朱筆がある。なお，16冊のどこを捜索しても訳業の由来・事跡等の記録及び奥書は見当らない)。

「史学」27巻4号(昭29)の幸田成友「ペリー日本紀行の最初の日本訳」によると，博士は「日本行紀」を手にされた時，初めはホークス編「ペリー日本遠征記」の日本最初の訳である手塚節蔵(大築拙蔵)・工藤岩次訳「彼理日本紀行」と思われたが，充分なる考証の後，オランダ語版からの重訳のハイネ著「日本行紀」と断定された。次に，「何人が如何なる動機で何年に本書を翻訳したか，確証を挙げて説明し難い」と言われ，本文等を種々検討後，「日本行紀」の翻訳年代を文久3年(1863年)以前と推定された。又，手にされた「日本行紀」には「越国文庫」と「図書寮」の蔵印があり，「幕末の外交問題に重きをなした越前福井の藩主松平春嶽が家臣に命じて本書を訳せしめ，一部を御手許本として身辺に備え，一部を同藩の文庫に納れて藩士の子弟に閲覧を許したとすれば，想像だけでも随分面白いではないか」と述べられ，ハイネ行紀の訳業の全貌が明らかになるのを期待されていた。

そして，昭和58年に中井晶夫訳「ハイネ世界周航日本への旅(新異国叢書第Ⅱ輯2)〔㊫210.5;S4〕が出版され，初めて現代語訳が出た(但し，日本に関する部分と付録の一部の訳であり，ペリー艦隊の帰路にあたる第三十篇珊維知島(サンドウイッチ諸島，後のハワイ)から第三十五篇リオデジャネイロまでは訳されていない)。ところが，その解説に「幕府がこのオランダ語版の存在を知って訳させたものが，大日本維新史料に掲載されている」と明示があり，すぐさま，「大日本維新史料　第2編の5」(文部省編，昭18)〔㊫210.61;D〕に掲載された箇所と同大図所蔵のハイネ行紀の該当箇所を対照してみた。あに図らんや，前者が漢字片仮名交り文で，後者が漢字平仮名交り文であるが，該当箇所は全てに渡り，文言は全く同一だ。

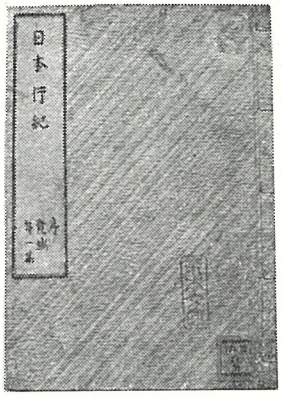
「大日本維新史料　第2編の5」のP.346には，〔日本行記○ハイネ著〔日本行世界周航記〕蕃所調所教授方訳島津忠重所蔵本。

如此ナレハ久シク懇請シタル日本ト貿易ノ条約モ逐ニ定マリ，……と掲載されている(この箇所は原本第二十二篇会議にて和親決定之事の最後の部分である)。このハイネ行紀オランダ語版は1856年に発行され，蕃所調所の名称時期は安政3年(1856年)～文久2年(1862年)までなので，翻訳の年代はこの間であろう(岩波の「国書総目録」(㊫025.1;K)をみると，「日本行紀」の見出しで，(成)万延二とある。成立年代は1861年の初めだ。版本はなく写本ばかりで，全訳16冊のものは見当らない)。又，「江戸幕府旧蔵蘭書総合目録」(㊫028.235;N)をひもとくと，P.20に，Heine，W のもとに彼のオランダ語版が記載され，さらに印記は<蕃書調所>，貼紙は「……千八百五十六年　日本行記　一，全一冊　中巳八月上旬備中守殿ヨリ求……」と明示がある。

ここで，倉沢剛著「幕末教育史の研究一」(㊫372.1;K34)等を参考にして，このハイネ行紀の訳業に触れてみよう。ペリー黒船の来航によって長い眠りから目覚めた幕府がとった積極的政策は，まず外国文書翻訳を司る訳官及びその機関の充実となって表われ，勝海舟等の努力によって「蕃所調所」が設立され，日本各地から第一級の洋学者が集められ，そこでは洋学を教授し洋書の翻訳を取り扱ったが，同時に洋書の収集及び蕃書・翻訳書の検閲も行なわれた。その頃の蕃所調所の教授方一覧には，手塚律蔵(堀田備中守家来，佐倉藩)，西周明〔後の西周〕(堀田備中守家来，佐倉藩)等が見られる。

ここで，「蘭書目録」ハイネ行紀の「貼紙」等をも参考にして，大担な推測をするならば，蕃書調所は1857年八月上旬にハイネ行紀オランダ語版を，備中守(堀田正睦)から得て，1861年初めに翻訳を完了し，それが蕃所調所教授方訳「日本行記」となり，又，蕃所調所には全国から俊英の洋学者が集まっていて，佐倉藩の連中もその訳された「日本行記」を写本し，藩に持ち帰ったか送ったとも考えられる。黒船来航以来，どの藩も新しい状勢に積極的な対応が急務な折，ペリー関係の訳書は情報として欲しいところだ。その写本が同大図所蔵本であるのかも知れない。

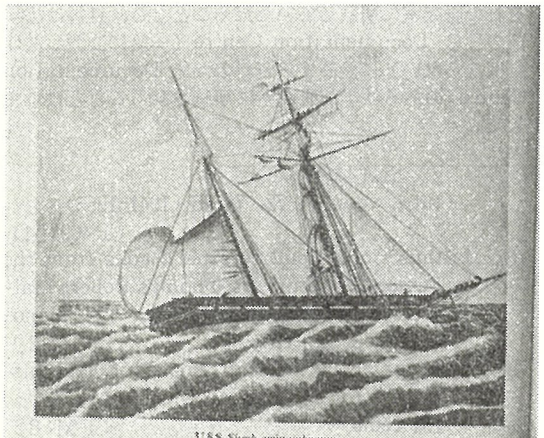
次に，全くこの逆の事も想像できる。当時，佐倉藩は



荒木文庫貴重書
ハイネ著
「日本行紀」
第1巻表紙

「西の長崎，東の佐倉」と言われた程，洋学の盛んな所，しかも藩主堀田正睦は「蘭癖」と称されたハイカラ主義者，長崎からハイネ行紀の蘭書を入手，早速，藩の俊英の蘭学者に訳せしめたとも推測できる（同大図所蔵本には「堀田氏印」と「元山文庫」の蔵印（朱印）がある。堀田備中守正睦は雅号を「見山」と称し，「見山侯」と呼ばれていた。「見山」は「元山」とも印刻できるので，「元山文庫」は堀田正睦の文庫印とも思える。この頃（1855年～1858年），正睦は再度老中になり，ハリスとの条約交渉等，開国に向けて奔走していた）。その後，まずハイネ行紀の蘭書が，正睦から1857年に，そして少し遅れて佐倉藩訳「日本行紀」の写本が蕃書調所の手に渡った可能性もある。蕃書調所では既存の翻訳書の収集及び検閲も行なわれていたので，検閲も兼ねて，それを写本したのが蕃書調所教授方訳「日本行記」となったとも想定できる。すれば，同大図所蔵本は，堀田正睦の御手許備付本であり，ハイネ著「日本行紀」邦訳の原本になるが……。

最後に，ケーリ文庫ホークス編「ペリー日本遠征記」第1巻に添付されている「ペリー自筆書翰」を紹介しよう。どの様な経路を経て，このペリー著名入りの自筆書翰が日本に来たのか定かでないが，S．E．モリソンが膨大な原資料を駆使し，5年の歳月を費したペリー伝"Old bruin"を参照して，この書翰が書かれた時期の状況設定をしてみよう（尚，難解な自筆書翰からタイプ原稿のかたちになったのは，法学部吉岡健一教授のご協力によります）。



カリブ海で台風に襲われ悪戦苦闘する戦艦
シャーク号（モリソン著"Old bruin"）より

この手紙は1823年1月8日に当時28才のペリーが，上司である西インド艦隊提督ダビッド・ポーターに宛てたものである（ペリーが，1822年に帆船戦艦シャーク号を指揮し，アメリカ商船を襲うカリブ海の海賊退治に出かけ，疲れて，一時ニューヨークに帰っていた時の様だ）。ポーターは米英戦争（1812～1814）で戦艦エセックス号に乗り大活躍した人で，この年ビッドル提督（ペリー来航7年前に浦賀沖に来た）に変わって，提督になったばかりである。

New York January 8th, 1823

Sir

A fever indisposition which has confined me to my room for several days has prevented me from calling on you in relation to my last conference with the Prests. of the insurance companies of this city. I made known to them your willingness to facilitate their wishes in respect to the Shark. They appeared gratified. And Mr. Nelson who is the public correspondent informed me that he would write to the Secy. in behalf of the office in hopes that it would be a further inducement to the Dept. to dispose of the vessel as they wished.

I understand from Capt. Rodgers that you have given directions to ship the new entrees for the Shark in the Grandport.

I respectfully request that you will give just instructions as to prevent them being sent to any other vessel.

They have been particularly selected and are essentially necessary to complete the efficiency of my crew. Mr. Benham who belongs to my vessel, and who proceeds to join her immediately. I had intended to have sent with them. I shall give him direction to report himself to you.

I have the Honour
To Be Respectfully
Your Obt. Servt.

M. C. Perry

Com. David Porter

前半の部分では，この当時のアメリカ海軍の上層部と保険会社との密接な関係が伺い知れ，後半では，ペリーは以前から快速戦艦シャーク号を特に気に入っていて，この艦に対する愛情が目にみえるようである。そして，ペリーの要求がかなえられたのか？　1823年2月1日付の友人への手紙では，シャーク号でメキシコのヴエラクルスとタンピコの間を巡航している様子が判る。

ともかく，今から162年前のこの黄色く変色した「ペリー自筆書翰」は，「歴史」と云うものをひしひしと感じさせます。

〔参考文献〕"Old bruin"：Commodore Matthew C. Perry, 1794—1858 …… by Samuel Eliot Morison.
（㊫289.3；P4—1b）他多数。

（整理課　高野成之）

「特別研究図書費」による購入図書

―より一層の共同利用を―

1984年4月より新たに「特別研究図書費」が設定されました。

研究資料費は，学部教員用としての学部図書費，研究所の図書費，学部教育研究助成費，個人研究費，にこの「特別研究図書費」が法・経・商の学部図書費一学部相当分（1985年度）増えた勘定になります。

この新設の「特別研究図書費」の持つ意味は，単に研究資料費が一学部相当分増額された，というだけではなく，もっと別の大きい意味があります。

従来研究資料費は部科別配分（学部図書費・研究所資料費）や個人別配分（個人研究費）であり，資料収集は部科毎縦割りであり，様々な問題をはらんでおりました。いわく，高額大型資料の収集は困難である。（「文部省私立大学研究設備整備費等補助金に係る研究設備」の「特定図書」の補助金申請という制度があるとはいうものの，交付されるとはかぎらない。）また，各学部学科・各研究所に利用がまたがるような資料も集められにくい。さらに，専門課程が設置されていない分野の資料も，少し高額になれば不可能に近い，等々であります。そして費用効率の点からも，可成り高額な資料でも，重複が生じやすく問題があった，と言えます。

そこで，上記のいろんな問題点を少しでも解消できるよう，経理当局のご理解も得て，「特別研究図書費」が設定され，共同利用の観点から，図書館が収集の窓口となって運用し，資料の所蔵保管の任に当ることとなりました。*

1984年度内に同図書費で購入した図書資料は下記の通りです。他の図書資料と同様，所属身分等にかかわりなく，広く利用が期待されるところであります。

ただ，リストでお判りいただけるように，図書資料の内には，本来なら「禁帯出」となるものも含まれております。（マイクロフォームのもの等）。しかし図書館で所蔵保管することにより，利用上著しく不便になることのないよう，「特別研究図書費」による購入図書資料に限り，特別の配慮をしなければならない，と考えております。

また，このリストは，関西四私大（関西・関学・立命館・同志社）の収書情報連絡会においても，四大学それぞれ同様なリストを交換し合い，一冊のリーフレットにまとめられております。したがって関西四私大の相互利用にも拍車がかかるのではないかと思われます。同リーフレットは，1985年度「特別研究図書費」により図書の購入希望を募る時に，重複購入を可能なかぎりさけるためにも，配布する予定です。

注）*「資料の保管場所は原則として図書館とする」（特別研究図書費の運用要項―「資料の保管」）のですが，特別な事情がある場合，例外的に扱っております。本年度購入資料の内，1，6，11番がそれに該当します。1番は第二外語，6番は体育より購入希望が出されたものですが，田辺校舎に移ることになっているため，それぞれの研究室に所蔵していただくこととし，11番は法学部のＥＣ Documentation Centre（一般に公開しなければならない）に設置する資料のため Documentation Centre のある法学部研究室に所蔵されることとなりました。

---

1. Ersch—Gruber (hrsg.), -Allgemeine Enzyklopädie der Wissenschaften und Künste, section Ⅰ & Ⅱ-Teil 1-300 〔034;A〕（二外）
2. Annual Reports of the Major American Corporations〔through 1980〕〔FM;7〕
3. Athenaeum ; a Journal of Literature, Science, the Fine Arts, Music & the Drama 1828-1921 〔P053;A5〕
4. Ganz, P.,—Les Dessins de Hans Holbein Le Jeune, 8 vols. 〔723.34;H〕
5. Education, vols. 1-98 (1880/81-1977/78) 〔P370.3;E6〕
6. 医学中央雑誌，第165-254巻（昭和36-45年）〔P490.1;I〕（体育）
7. Journal of the Royal Anthropological Institute, vols. 71-72. 74-95 (1941-1965) 〔P469;M〕
8. Malthus Collection : Selected Books from the Personal Library of Thomas Robert Malthus in 2 seg. microfiche, 129 monographs & 112 titles 〔FF;2〕
9. Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions ; unit 3, 164 reels 〔FM;8〕
10. Philosophisches Jahrbuch, vols. 1-81 (1888-1974). 〔P100.4;P3〕
11. Studia Diplomatica, 1948-1980 〔P319;S9〕（法）
12. Zeitschrift für Psychologie, vol. 1-188 〔P140.4;Z2～Z7，P490.4;Z〕

"びぶりおてか"　同志社大学図書館報　No. 37　1985年4月1日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 251―3971

編集責任者　西田逸郎（図書館庶務課長）　印刷　芳文堂印刷所